東　大　阪　市

地域との連携　「長瀬川水辺環境づくり活動」
～長瀬川で逢いましょう！～

はじめに

長瀬川は300年の歴史を誇る農業用水路です。大和川より取水し、柏原市、八尾市、東大阪市を経て第二寝屋川に流れ込んでいます。

1704年に度重なる水害から村々を守るため、現在の大和川に付け替えられました。川の流れが変わったことにより農作物に必要な水がこなくなり、旧大和川（現在の長瀬川、玉串川）を田畑に水を供給する農業用水路としました。この水路を良好に保つために、農民による「築留樋組（つきどめひぐみ）（現在の築留土地改良区）」が結成され水の管理を行うようになり、現在に至っています。

ところが、高度成長期、農業用水として利用していた長瀬川の水質が急激に悪化し、臭い汚い川と化してしまいました。その川が、下水道の整備が進むにつれて以前に比べ格段に水質が向上してきています。コイやフナはもちろんモロコやオイカワなどの魚、ヤゴや貝などの水生生物も棲める川に戻ってきています。

今、総延長14km（東大阪市域７ km）の長瀬川を都会の数少ない貴重な水辺空間として、地域住民と行政が手を携えて様々な活動に取り組んでいます。

地域住民と共に植栽の手入れ

長瀬川水辺環境づくりが始まった背景

長瀬川は、昭和30年代に用水と雑排水を分離して流す構造にされましたが、それから40年余り経ち護岸も痛み、ひどいところでは用水と雑排水を分離している壁が壊れて用水と排水が混ざり、悪臭やユスリカが発生するなど水質汚濁がひどくなりました。

そこで、平成５年度から「大阪府営いきいき水路モデル事業」として護岸の整備改修工事が進められています。この事業については、単なる護岸の改修だけでなく、都会の数少ない「水辺空間」・「親水空間」として地域住民に憩える場の提供ということを念頭に置き、水路の管理用通路を遊歩道とし、遊歩道の所々には休憩施設などの親水施設も整備されています。なお、その整備については、地域住民の方々と常に意見交換をしながら住民に親しめる長瀬川をめざして進めています。

都会の貴重な水辺空間「長瀬川」

地域住民の憩いの場

長瀬川下流域整備工事

長瀬川の整備工事は、１期地区として、大和川からの取水口がある柏原市域から東大阪市域の近鉄奈良線までの間を行い、平成15年度からは２期地区として、近鉄奈良線から下流側、第二寝屋川までの間を現在進めています。

「長瀬川で逢いましょう！」を合言葉に水辺環境づくり活動

長瀬川の整備が進むにつれて、住民が親しめ、憩える水辺空間として蘇ってきました。そこで、この良くなった環境を「地域住民と行政が共に手を携えてより一層良いものにして行こう」、「お互いできることをやって行こう」と、「長瀬川で逢いましょう！」を合言葉に、大阪府、東大阪市、築留土地改良区と地域自治会や学校、ＮＰＯ団体などと協定を結んで水辺環境づくり活動に取り組んでいます。

東大阪市域では現在４地域で地区協定を結んで活動を進めています。水路周辺の清掃活動や植栽帯の維持管理、また、水路内の清掃や水生植物帯の管理なども共に行っています。

協定を結んでいる殆どの地区で、小学校の環境学習として長瀬川での活動を地域の方々と共に数多く取り組んでいます。

「長瀬川クリーン大作戦」と銘打って、川の生き物調査、水生植物の植え付け、その後の手入れや清掃、刈り取り、そして、刈り取った水生植物を使ったクラフト。長瀬川の水質調査から水質改善についての学習。長瀬川を通して様々な取組を行っています。学年の終わりには１年間の成果発表会を行い、下級生に活動を引き継ぎ、地域の方々にも成果を披露している学校もあります。

小学生による水生植物の刈り取り

長瀬川での活動から環境の大切さを学び、そこから自分達の住むまちを愛する人間になってもらいたいと取り組んでいます。なんと言ってもこの活動の中で、子ども達が活き活きとした目で取り組んでいる姿が印象的です。

その他、長瀬川の沿線を歩く「ウォーキングイベント」や、夏に長瀬川の水を利用した「打ち水」、秋には地域を越えた交流の場となる「収穫祭」などの催しも行っています。

平成18年には農林水産省の「疏水百選」に選ばれました。見た目の景観だけでなく、これらの活動が評価され大阪で唯一認定されました。

「長瀬川で逢いましょう！」を合言葉に益々活動に広がりをみせています。

長瀬川ウォーキング

これからの活動をどう進めるか

長瀬川水辺環境づくり活動については、行政がまずキッカケづくりをして地域が動き出しました。この様な活動は、地域から盛り上がって動き出すことが理想です。昔はみんなが川を大切にし、地域全体で守っていたのです。

地域に根ざした貴重な財産を守って行くために、これからも地域と行政が手をつないで、互いに無理をせず、楽しみながらできることをする。そして、互いにどこかで必ず助け合うという立場で、常に意思疎通を図りながら活動を続けることが大切ではないでしょうか。